

米欧回覧

第35号
発行
米欧回覧の会
編集
メディア部会

第三十四回の全体例会は七月三日(土)

十周年記念事業についての討議と

「日本の外交について」岡崎久彦氏の講演

七月の全体例会は三日(土)

午後一時から国際文化会館講
堂で開催される。

一部では会務報告に続き、十
周年記念事業についての具体
案について意見交換をし討議
したい。また、その組織につい
ても事務局の充実と併せて議
題とする予定である。

恒例になった二部の講演に
は、元駐タイ国大使、著述
家、外交評論家として有名な
岡崎久彦氏を招聘し、「現下
の国際情勢と日本の外交」に
ついてご講演をいただくこと
になった。

ご承知の通り、岡崎氏は、
「陸奥宗光とその時代」、



松前城と桜 (5月7日)

「小村寿太郎とその時代」、
「幣原喜重郎とその時代」、
「重光・東郷とその時代」、
「吉田茂とその時代」と、日
本の近代史を主要な人物を中
心に描いてこられた方であ
り、ご自身の外交官経験とも
あいまって、貴重なお話が伺
えるものと期待される。

「米欧回覧実記」全五巻
現代語訳、出版決まる！
二〇〇一年の「英文版」出版
以来懸案となっていた「米欧回
覧実記」の現代語訳作業は、当
初会員有志の分担で行う案も
あったが、結局、水澤周氏が独
力ですすめることになり、この
春その訳業の大仕事が完了し
た。

そこで、四月の全体例会で
は、同氏から、その訳出に関す
る貴重なお話をうかがった。そ
れは極めて興味ある講演であ
り、その概要は四、五頁に掲載
されている。
また、その出版について

も、ある篤志家からの協賛
(寄付金)を得て目途があつ
き、慶応義塾大学出版会か
ら、二〇〇五年には五巻本で
出版される運びとなった。

桜花爛漫の道南

「歴史ツアー」、盛況！

当会の恒例行事となった
「歴史ツアー」は、五月七日
から十日まで三泊四日で行わ
れ、会員外も含めて二十五名
が参加し、松前、函館、小
樽、札幌を回覧した。旅は天
候にも恵まれ、各地で地元各
氏の歓迎・協力を得ることが
でき、きわめて充実した、内
容のある旅となった。また、
札幌の歴史ある赤煉瓦の旧道
庁舎においては、当会も主催
者の一翼を担う形で、岩倉使
節団に関する映像の会並びに
田中彰先生の講演会が催さ
れ、会場は補助席を出してな
お立ち見ができるほどの盛況
だった。(詳細は八・九頁)

中村政則教授の
連続セミナー終わる
日本近代史を通観する三回
にわたった連続「歴史セミ
ナー」は充実した内容で終了
した。

連続セミナー終わる

これには毎回四十名前後が
参加し、十周年記念事業に向
けて会員の歴史認識において
大いなる学習になり貴重な布
石となった。

(詳細は六・七頁)

映画「ラストサムライ」と
テレビ「新選組」の影響で、
サムライへの関心が若者の
間にも高まりつつあるとい
う。新渡戸稲造の「武士道」
や李登輝の「武士道解題」が
ベストセラー入りしている
のもその証左といえる。

その背景にあるものは
いったい何か。一つは最近の
リーダーにみる無責任、墮
落、倫理感の欠落に対する
憤りである。そ
して二つ目には、
特に若い世代に
おける歴史認識
の貧弱さがあり、
それが失われた
サムライの存在
やその精神の再
発見、再認識へ
つながっている
ように思われる。

サムライ・マインドの蘇生

泉 三郎

「義」を考えることである。
「私欲」に「道義」を優先さ
せ、私でなく公のために生き
ることである。いざとなれば
そのために命も捧げる精神、
それが士道であり、サムライ
の本質である。そして、それ
は人倫の基本として江戸時
代、武士だけでなく町人や農
民など一般の人々にまで浸
透していったのである。
日本は近代化の過程で、西
洋的な利益追求
の考えを取り入
れた。それが戦後
とくに著しく、
まっとうである
べき個人主義か
ら、利己主義、自
己中心主義へと
墮落し、一般市民
だけでなく指導
層やエリート層
にまで汚染が広
がってしまった。
岡崎久彦氏は明
治憲政にサムラ
イ・デモクラシー
という言葉を当
てておられるが、サムライ・
マインドは、西洋でいうノー
ブレス・オブリジエに通じる
ものである。

どう築いていくかについて、
真剣に回覧し、考え、議論し、
命懸けで決断し、実行した。
その真摯な態度がわれわれ
の心を打つ。久米の「実記」
をひもとけば、そのサムラ
イ・マインドこそがわれわれ
読者の琴線をふるわす源に
あることを感得するだろう。
この日本の文化遺産とも
いふべきサムライ精神のコ
アは何か。それは第一に「道

当会としても若い世代へ
アプローチが重要課題に
なっている折から、NHK・
TV「新選組」が放映されて
いるこの時期、サムライ・マ
インドの再認識を促し、その
精神を蘇生させる好機だと
思われる。

第33回 全体例会

時代環境の変化と当会のあり方 十周年に向けた展望と 建設的な意見の交換

当会設立九年目となる二〇〇四年度最初の全体例会が、四月十七日(土) 国際文化会館ホールに約六十名が参加して開催された。

これまで年に四回づつ全体例会をしてきたので八年で三十二回、そして今回が三十三回目となる。例会は、第一部が積極的、建設的意見が続出した総会、第二部が「実記」の現代語訳を終えた水澤周氏の興味深い講演(詳細は四・五頁)の二部構成で行われた。司会は浅沼氏。

◆今後の活動方針と組織について

先ず泉代表から以下のような挨拶と報告があった。

六本木ヒルズがオープンして一年になるが、汐留、品川地区再開発と続き、東京の景観も大きく変わるうとしている。身近な国際文化会館も建替えることが決まった由で、来年三月以降しばらくは使えなくなる。

また、世界情勢もイラク戦争、自衛隊の派遣など大きな変化がある。経済的にみれば中国が世界の経済を引っ張る有力な機関車になってきたし、インドもそれに続いて発展途上に

あることを感じる。今年夏に参院選挙、秋にはアメリカの大統領選挙もある。われわれを取りまく時代環境は大きく変化していることを認識しなければならぬ。

▼事業報告

二〇〇三年度の事業報告ならびに収支は資料(別表)をご覧いただきたい。毎月活発な活動が行われているが、特に目立っていることを報告する。

まず日米交流百五十周年記念シンポジウムを行い、ドナルド・キーンさんや松本健一さんを招いてお話しを聞いた。また、百五十周年の日本の近代史を振り返るということで中村政則先生にお願いして三回にわたるセミナーを行ったことが大きな事業といえる。

▼NPO問題

特定非営利活動法人(NPO)については二十一名の幹事会のメンバーを中心に定款を起草、先日NPO法人の申請を東京都庁に提出し、四月十二日に受理された。

七月半ば頃と予想される認可の時点から「米欧回覧の会」から「米欧回覧の会」になる。要点はニュースその他で

米欧回覧の会・2003年度活動報告

	全体例会	読書会	歴史	現未来	国際交流	メディア	関西支部
2003年							
4月	28回例会(4/19) 「近習から科学技術ポスターへ」 一久米邦武の成熟— 高田誠二氏	「コングレス・黒人問題など」(4/3) ★英訳の会(4/17)		「イラク・北朝鮮問題への 日本外交のあり方」(4/4) 藤原宣夫氏 長谷川公一氏			
5月		「郵便制度・農業・他」(5/8) ★英訳の会(5/15)			佐倉歴史ツアー (5/17)		スペイン・ポルトガルの略記 ヨーロッパ総論(5/22)
6月		「アロードウエイ・セトルパーク・運可」(6/5) ★英訳の会(6/19)	「明治日本の技術導入 東京大学工学部 誕生秘話」 山形言一氏(6/4)			◆ニュース31号	
7月	29回例会(7/12) 「近代日本・三つの岐路」 中村政則氏	「ナイアガラ」(7/3) ★英訳の会(7/17)	29回例会 中村政則氏講演会 (7/12)				
8月		(お休み)					スエズ・ペルソ・サイゴン・ 中国の帰航日程(8/20)
9月		「ボストン平和会と愛国論・他」(9/4) ★英訳の会(9/11)	「満鉄調査部の歴史的考察」 永富邦雄氏(9/30)			◆ニュース32号	
10月	日米交流150周年記念シンポジウム 「アメリカグローバリゼーションと 日本のアイデンティティ」(10/25) ドナルド・キーン氏・松本健一氏	「貨幣について」(10/2) ★英訳の会(10/16)		「日本政治のあり方を考える」 (10/3)			
11月	30回例会(11/8) 「NPO化問題を考える」 「岩倉使節の米欧回覧」 (ビデオ3巻計90分)を上映	「パイプについて」(11/6) ★英訳の会(11/20)				30回例会 ビデオ上映 (11/8)	関西歴史ツアー 企画・案内・参加 (11/18-19)
12月		「欧米から見た岩倉使節団」小菅心子氏 忘年会(12/4) ★英訳の会(12/18)				◆ニュース33号	
2004年							
1月	31回例会(1/26) 「新年懇親別例会」 テーマ「スイス」	「貿易・工業および制作・風景・他」(1/8) ★英訳の会(1/22)	日本近現代史(連続セミナー) 第1回「大正デモクラシーの運命」 中村政則氏 (1/29)		31回例会 「新年懇親別例会」 (1/26)		ビデオ鑑賞 「岩倉使節の米欧回覧」 3巻(1/23)
2月	スイス駐日大使 ジャック・バルダン氏 ゲスト:近衛忠輝氏	「倫敦府日記」(2/5) ★英訳の会(2/26)	第2回「戦争はふせげんか」 中村政則氏 (2/28)	「アメリカはどんな国か、 日本はどう向き合うのか」 吹田尚一氏(2/6)		◆ニュース34号	
3月		「倫敦府日記」上(3/4) ★英訳の会(3/18)	第3回「戦後日本の岐路」 中村政則氏 (3/27)				

お知らせする。
▼十周年記念事業

これからの年度の大きな課題は、来年の設立十周年記念事業の計画・準備である。

記念事業の一つの柱として、実記の現代語訳の出版を実現することが大きな課題である。

それから、グラント・シンポジウムを開催したい。前回は、「米欧回覧実記」を主に素材として研究者を外部から招いたのに対して、今回はなるべく我々のメンバーの研究発表も含めて考えたい。構成は、実記を読む会(英訳実記を読む会を含む)、歴史部会と現未来部会の三つが軸となることが望ましい。

米欧回覧実記の研究は勿論であるが、岩倉使節団のもつ意味そのものについても題材としたい。歴史部会は、主に日本の近代史を総括するテーマ、現未来部会は現代の問題をテーマに、例えば三日間にわたって、それぞれの部会の担当で進めていくことを期待したい。

▼次世代問題

もう一つ重要な問題は、これからの五年、十年を考える場合、会員の平均年齢が非常に高いということである。

そこで若い世代にどうアプローチしていくか、会に入ってもらおうにはどうしたらいいかを真剣に考える必要がある。これは十周年に当たり一番大き

な問題かもしれない。これには具体的な案や考えについて後ほど意見を伺うことにする。
(五頁参照)

▼会則の改定

NPOに関連して会則も若干改定する。会員を正会員、準会員、賛助会員の三つにする。

正会員は従来の会員で、現在の会員は対象とならないがNPO化以降に入会の会員から入会金五千円をいただく。年会費は変更なく五千円としたい。準会員とは、地方会員の方、家族の方などのために新設するもので会費は二千円程度とする。準会員はまた、入会を躊躇している人、試しに入ってみたいという人を一年間に限って受け入れる、会員拡大のための制度でもある。

それから個人または法人の賛助会員は、資金的に賛助する意向のある人に一口年間一万円でお願するものである。

▼事業基盤の強化

最後に一つ申し上げておかなければならないことがある。こうして活動の展開が多彩になるに伴い事務局体制をどうしても充実していかなければならないという問題がある。

そのためには資金的に充実させる必要があり、特別賛助金を皆さんにお願いしたい。任意の一口一万円を考えており、お願い書をつくり、近々送付したいと考えている。

米欧回覧の会
2003年度・収支報告

2003・4~2004・3

収入		支出	
◎前年度よりの繰越	363,623	◎例会および部会関連費用	1,427,932
◎会費	2,592,047	案内郵便代	172,830
年会費	1,114,047	会場代他	914,515
例会および部会会費	1,478,000	講師お礼・車代	340,587
◎歴史ツアー	991,500	◎歴史ツアー	865,825
佐倉ツアー	301,500	佐倉ツアー	255,195
関西ツアー	690,000	関西ツアー	610,630
◎書籍売り上げ (岩倉使節団の再発見)	398,970	◎NEWS関連費用	365,465
◎雑収入	38,398	31~34号印刷代	193,200
		送付郵便代	172,265
		◎事務局経費	991,809
		電話・通信費	349,616
		会議費	143,083
		印刷費	39,900
		PR費	190,650
		事務費	268,560
		◎次年度繰越金	733,507
	4,384,538		4,384,538

◆二〇〇三年度収支報告

続いて岩崎氏から収支の報告が行われた。

収支報告書(右表)の通り、事務経費は大きくくれば「NEWS関連費用」と「事務局経費」の約百二十六万である。一方、収入は毎年安定的に入ってくる年会費の約百十一万で、これに三十五万程度の赤字になるのが基本的な構造である。

◆部会報告

磯野氏(実記を読む会)、小林氏(英訳実記を読む会)、小野氏(歴史部会)、小田氏(現未来部会)、石川氏(国際交流部会)、足立氏(メディア部会)

その以前に経費をかけた「書籍売上げ」である。これらを除くと試算で約二十四万の赤字となる。会員数の増加と赤字にならないような個別事業運営が今後とも必要である。

最後に、松前氏が五月七日からの北海道歴史ツアーについて直前のアピールをおこなった。続いて同氏から初参加の新人会員二名が全員に紹介された。これは、NPOに関する議論やアンケートの中で指摘された、新入会員が部会などに気軽に参加できる環境を少しでもつくることの試みの一つである。

『米欧回覧実記』現代語訳を終わって

水澤 周

第三十三回全体例会の第二部、『実記』の現代語訳を完了した水澤周氏の講演要旨である。

同行二人

これまでも時々会報で報じていた『米欧回覧実記』の現代語訳作業は、今年の一月半ばに全五冊を終了したが、スタート以来のその作業日程は、奇しくも使節団の旅程、六三二日にほとんど等しい六三五日を費やした。訳者としては、久米邦武の不思議な呼びかけというか、「えにし」のようなものを感じてしまう。四国の八十八か所回りの巡礼は、弘法大師といつも二人連れという気持ちから「同行二人」と墨書した笠を



洋装の久米邦武

被って歩くが、私の「実記現代語訳の旅」も、まさしく久米さんとの「同行二人」という感じであった。

作業総量は四〇〇字詰め原稿用紙にすると約四〇〇〇枚、字数にして一六〇万字、六三五日の間、欠かさず二五〇〇字ずつは書いていたわけだ、かりにこれを般若心経二六六字の写経に費やしたとすれば、六〇〇〇巻近くを写経したことになり、私は多分立派に成仏したことと思う。付けた注は八〇〇本に達したが、これは『実記』を現代においてきちんと理解するためには必要最小限のものであると思っている。

久米邦武の複眼

『実記』巻頭の「例言」の中で久米さんは「第一編は西洋世界への旅の最初で、著者の関心は主として我が国と異なる風物のことに向かった。第二、第三編は、工業生産とその産物について詳しく書くことに努めた。第四、第五編では重複を避けてそれまでの記録にはなかったことを題材に選び、また、記録の補充・補正を目指した」というように編集的意図を述べている。しかし、もう一步

踏み込んで内容的な意図を推察するならば、次ぎのように言えようか。

第一のアメリカ編は、未開あるいは半開から文明へのアップローチの旅であり、また、全くの新天地に西洋文明を移植した場合、どのように育つかという実験を見る旅である。

第二のイギリス編は、産業革命というものの成果をリアルタイムで観察し、当時の西洋文明の最高到達点を見るとともにそのバックグラウンドを探る旅である。

第三編で旅した諸国では、産業の発展段階をやや細かく見るとともに、国民性と国家形態との関係を分析的に見ながら近代的国家のありかたの種々層を見た。また、さまざまな規模の国家のそれぞれにあるパワー・ポリティクスのパリエーションも見た。

第四編では、ローマ以来の伝統が生んだ老帝国の限界と衰退、そしてその再生の可能性を観察し、また、西欧文化・文明のオリジンとも言うべきものも見た。こうして一行は、アメリカですでに予見した「文明の一生」といったことも改めて感じ、その源流から末流までの考察の材料を得た。

そして、最後の第五編では、それまでの旅で見たことの総合と分析を行っている。これらのことを見て取るに

は、終始同じ視線では出来ない。使節団は旅を重ねながらその体験をもとに、視点の定め方を微妙に変化させており、記録者である久米さんのものを見る力も次第に成熟し、いわば複眼で見えるようになっていく。

検算と校閲

現代語訳作業の中間報告でも触れたことであるが、久米さんの記述には数字の間違いや方角の間違い、歴史的事実の誤認などもかなり多く、十九世紀後半の「西洋事情」のエンサイクロペディアとして読まれる可能性を持つ現代語訳としては、かなりその補正に神経を使った。しかし、これは別に久米さんの仕事の揚げ足を取ることが目的ではない。原本の様子を見ると、公けの刊行物であるのにもかかわらず、十分な校閲・校正作業が行われなかった節がある。田中彰氏の文庫判の編纂姿勢は、主として原本の再現にあつたので、校閲は行われていたけれども、その範囲はかなり限られたものとなっていたであろう。

英訳本の校注を見ると、かなりきちんとした校閲がそれぞれの訳者によって行われたこ



「サンマリコ」寺鐘楼(銅版画集より) 旅客ノ来ルモノ、相楽ミテ帰ルヲ忘ル、トナン

とが分かる。しかし、やはり外国人の目では見逃すところもあり、また分担訳であるため校閲にやや粗密の差が見られる。現代語訳は、はじめに一貫した目で行った全面的校閲であると言えるかも知れぬ。もちろんその作業は完全とはいえない。しかし、今後『実記』を研究する人々にとって、さらに考察を深めるための手がかりを提供することが出来ると思えば、大きな喜びである。また、読者の裾野が広がることによって研究の多角化がいつそう強化されるであろう。

久米さんの「間違い」の原因も考えなくてはならない。当時すでに西欧の中でも先進的な国ではさまざまな統計資料も作られていた。しかし統計のない国もあるし、また、統計の作

成姿勢も異なっていたりした。そもそもそういう統計数字の扱いは、明治初期の人々にとつて初めての体験だった。

地図にしても、ハンド・アトラス的なものが出来てまだ日は浅く、ナショナル・アトラスに至っては、久米さんたちの旅よりもかなり後、一八九九年に至って初出するのである。

アメリカ西部の汽車の旅の中で、久米さんはグリーン川(原文ではグライン川)の末はメキシコ湾に入る、南部水系の有力な川だと言っている。しかし事実はグリーン川はコロラド川に入り、カリフォルニア湾に注ぐ。単なるケアレス・ミスか、同行したデ・ロング公使あたりのミスリードとも思えるが、調べてみるとコロラド川中流はまだボートによる実地調査中で、その全貌が分かったのは久米さんたちの旅の七年後、ようやく一八七九年のことであった。つまりアメリカ人にとつてもこれはまだテラ・インコグニタだったとも言えよう。さまざま統計を手にし、完備したアトラスを持つている私たちが、簡単にあげつらうことが出来ないものが、そこにはあるような気がする。

『実記』三大不思議

それはそれとして、現代語化作業が続いているなかで、久米さんの記述には不思議なこと、いろいろな出て来た。それを、

事実関係を調べては補注のよいうな形で解決したのであるが、中でももっとも不思議に思っただのは、次の三点であった。

①アメリカ編で、ナイヤガラ湖の観光の旅の途次、オールバニーとシラキュースの間に存在するはずのない大きな湖を見ているのはなぜか。

②ヴェニスに到着したのは夜の十時ということになって、いるのに、「日光爽快ニ」照っているのはどういうわけか。

③最後の上海・長崎間の日程で九月五日が二度現れる。これを単純ミスとしてカットすると、船の速度は異常なものとなってしまふ。ではどのよう解釈するか。

②の例の場合、「月光爽快ニ」と、単なる誤植とする手もちろぬあるのだが、時間の記述のミスと考えることも出来る。なかなか一筋縄では行かない。「校閲探偵」の腕の見せ所である。

例会の講演では、このあたり少し詳しく述べたのだが、会報では紙面の都合もあり、詳記出来ない。「謎」のままにしておきたい方は、現代語訳の出版を待ちたい。出版社に慶応義塾大学出版部に決まった。出版期日はまだ未定だが、多分来年前半には五冊セットとして出せると思う。

問題提起

今後の運営について・・・ 若い世代へのアプローチ

四月全体例会において泉代表から以下のような問題提起があり、熱心な討議がおこなわれた。

◆ 来日している若い外国人にアプローチするのはいいのではないか。

◆ そもそも「米欧回覧実記」の存在を知らない。歴史の勉強をしても「岩倉使節団」のところまでカリキュラムがいかない。福澤諭吉は知っていても「岩倉具視って何？」ということだと思ふ。大学ばかりでなく、中学校ぐらいのところからクラブ活動でもよいので少しずつ浸透していくことが大切。

◆ スイスに旅行をしたが、使節団がルツェルンやインターレーケンに行ったことは知らなくて、帰ってきてから「実記」を読んだ。一般に関心の高い旅行の分野で、こういうことがかつてはあったのだということを若い人たちに、何かの機会に伝えると興味をもつのではないか。

◆ 現代語訳や英語版が学校

でとりあげられたら嬉しいなと思ふ。

◆ NPO設立をきっかけにマスコミに一斉に働きかけたらどうか。当会はユニークなNPOだと思ふのでそれを売り物にやる。テレビ番組で取上げられることがあればいい。

◆ 自分の子供を連れてくる人は少ない。むしろ友人など他人の子供の方が素直なコミュニケーションができる。若い人は待ちの姿勢ではむり、こちらから戦術的にアプローチするしかない。

◆ 設立の時から課題でいろいろ努力したが、これまで実らないので、違うやり方をしなければならぬと思ふ。こっちは来いという言い方がいけないのかと思ふ。若い人たちにやってもらってその成果を発表してもらいたい。提供できる素材はいくらもある。

若い世代へのアプローチについては、幹事会でも、現未来部会から案がでた「日本未来像」などのテーマの懸賞論文募集の検討、あるいは、青年部をつくって、三十代以下の会員による自主運営活動の推進などの意見が出されている。

歴史部会 連続セミナー

十周年記念事業の布石を固める 中村教授の日本近代史 充実したセミナーを終了

歴史部会連続セミナーの第二回、第三回は二〇〇四年二月二十八日(土)、三月二十七日(土)に学術総合センターで行われ盛會裡に終わった。以下は中村政則教授の講演要旨である。

第二回(二月二十八日) 十五年戦争― 『回帰不能点はどこか』

戦争の呼称

「あの戦争」の呼称は一九六〇年代に出そろった。大東亜戦争、太平洋戦争、第二次世界大戦、帝国主義戦争、抗日戦争、十五年戦争などである。この問題に決着がつかないと戦後は終わらない。八十年代に戦争観はさらに多元化した。その最大公約数は次の四つである。

- ① 中国に対しては侵略戦争
- ② 東南アジアに対しては謝罪
- ③ 米英蘭とくに日米戦争は帝國主義間戦争
- ④ ソ連は日ソ中立条約を破った侵略者

四つは関連している。私は一九二八年の張作霖爆殺事件から敗戦までの「十五年戦争」とい

う視点からみていく。中国フアクターを重視し「日米中のトライアングル」の中で戦争を理解したい。

『回帰不能点』Point of no returnはどこか

「いつだったら戦争はふせげたか」「歴史のこわさと面白さ」で私は次の三つの時点を指摘した。

- ① 大正デモクラシー
- ② 満州事変(関東軍の暴走)
- ③ 日独伊三国同盟

当時の国民には開戦決定権はないから「国民がふせげる段階」(①)と「権力者がふせげる段階」(②③)と分けて考えねばならない。今回は回帰不能点を対中国関係と対アメリカ関係に分けて考える。まず対中国の回帰不能点である。

▼ 満州事変

満州事変は大きい事件だが局地戦で、タンク―停戦協定(一九三三年五月)で一旦終わった。あのときに事変が盧溝橋事件まで進むとは誰も思わなかった。事変に関して新聞とラジオが戦争熱を煽った。ラジオは一九三二年に百万台を突破しNHKの臨時ニュースは



中村政則教授(右)と歴史部会・半澤健市氏(左)

満州事変のときに始まった。「男子の本懐」の取材で朝日新聞の記事を調べた城山三郎氏は「朝日新聞はまるで官報だ」と、同紙が戦争のアジテーションとお先棒担ぎに変身したと対談で私に語った。

▼ 西安事件

一九三六年十二月に軍閥張学良と国民党の蒋介石が内戦停止と抗日で一致し(西安事件)、さらに抗日は翌年九月の国共合作へと進んだ。国際ジャーナリスト松本重治はのちに「西安事件から盧溝橋事件(一九三七年七月)までの約七カ月間は、これを静かに回想してみれば、日中戦争・太平洋戦争・敗戦へと続くものであり、したがっていわば日本の運命を決定した時期であった」と書いている。(『上海時代』)日中戦争開戦時に日本軍部は「二、三カ月で支那を叩きのめす」と豪語したが百万の軍隊を派遣しても中国に勝てなかった。日本は中国のナショナ

リズムの強さを認識できなかったのである。

次に対米関係での回帰不能点に関して述べる。歴史学者の多くは一九四〇年九月の日独伊三国同盟を回帰不能点とみ、国際政治学者には日米交渉段階でも戦争回避の可能性をみる人がいる。

▼ 松岡洋右の構想

日独伊三国同盟と同年十二月の経済新体制確立が次の回帰不能点となる。松岡外相の構想は対米依存体制からの脱却による大東亜共栄圏構築であったが南進政策によって米英蘭の既得権益との衝突を内包していた。これに対してアメリカは経済制裁で対抗した。

▼ 日米交渉での暫定協定案

国際政治学者の細谷千博は「日本側が出した乙案に対して、アメリカ側が修正乙案を出そうとしていた。あれが交渉のテーブルに乗れば(戦争)回避の可能性はあった」といっている。政治学者五百頭部真・箕原洋平らによれば日本側も米国の暗号電文を解読し東郷外相は米の修正乙案は日本の乙案とほぼ同じだからその米国からの提示によって戦争回避可能と読んでいた。だが修正乙案が出されず妥協不能な「ハル・ノート」が突きつけられた。その背景には米国の対日融和策への中国の徹底抗議、蒋介石か

ら米國務省へ発信された「洪水のような電文」があった。

■ 御前会議など

御前会議にも問題があった。木戸幸一は御前会議を「あれは癌だ」といい、昭和天皇も「御前会議はおかしなもの」(『昭和天皇独白録』)といった。この会議は幕層の起案が上部で決定される過程で責任が拡散するシステムである。下は上が悪いという上は下が悪いという「無責任の体系」である。

このほかに大本営発表による虚偽情報の伝達、経営学者の共著『失敗の本質』で分析された「成功は失敗のもと」と論、三八式小銃と戦艦大和が共存する技術のアンバランス、極端な精神主義など、別の視点からの問題も多かった。

第二回(三月二十七日) 戦後日本の岐路― グローバリゼーションの 視点から

■ グローバリゼーションと戦後時期区分

戦後日本の岐路をグローバリゼーションの視点から問題にしてみたい。グローバリゼーションは十五世紀末のコロンブスの「アメリカ発見」に始まり現在はその最終段階(プラネタリゼーション)ともいわれる。グローバリゼーションへの

態度に肯定論、否定論といろいろある。あ。る。戦後の時期区分をすると次のようになる。

- ① 占領とサンフランシスコ講和(一九四五～五二)
- ② 高度経済成長(一九五〇～一九六〇年(代))
- ③ 変動相場制への移行と石油危機(一九七〇～一九八〇年(代))
- ④ グローバル資本主義(一九九〇～二十一世紀)

■ 占領とサンフランシスコ講和

日本占領は世界史上でも珍しい例で、ハーグ条約の枠を越えて占領軍は日本の徹底的な民主化、非軍事化を求めかつ実行した。これには第一次大戦後の過酷な対ドイツ政策の失敗から教訓を学んだという背景がある。経済運営では、一九四九年の経済安定九原則、ドッジライン、一ドル＝三百六十円の為替レート設定で日本経済を世界経済に組み込んだことが重要である。政治的な岐路はサンフランシスコ講和体制(日米安保体制)を選択したことだ。次の三つの選択肢があったが①は現実的な選択だった。

- ① 吉田茂の軽武装・経済中心主義
- ② 社会党の全面講和・非武装中立、アジアとの連帯の路線
- ③ 鳩山一郎・岸信介の憲法改正、国家主義路線

一九六〇年安保闘争で③は挫折し①の選択が確認され②はその補完物となった。その代償も大きくこの選択で日本の軍事と外交(プラス経済)は米国の意向を無視しては何もきめられないという従属的構造がきまった。

■ 高度経済成長

一九五〇年に始まる朝鮮戦争特需は日本版マーシャルプランの効果をもった。貿易と資本の自由化が対外競争力増強のための技術革新と設備投資増加の誘因として働いたことが大きい。先進資本主義各国は総じて高度成長を達成したが日本は突出していた。どの国にもある歴史的勃興期に当たっていたのである。国際石油価格の低位安定、国内政治の安定も寄与が大きかった。

① 技術革新

② 間接金融体制・貯蓄率の高さ、低金利の企業融資による

③ 活発な設備投資

④ 良質な労働力

⑤ 対米輸出

が高度成長の要因であった。輸出市場は対米依存率が三割で西独のシュミット首相に「だから日本はアメリカにか友人ができないのだ」と言われた。西独は一国への輸出は一〇%を超えない政策をとっていた。ただ日本の場合には地政学的に輸出相手国の分散は困難

な面もあった。

■ 変動相場制への移行と石油危機

一九七一年のドルの金への交換停止と七三年の変動相場移行は、米国の対外債務増大によるものでドルへの信認が低下し「カジノ資本主義」なる投機時代に道を開いた。日本は一九七三年、七九年の二度の石油危機を克服したが、その「減量経営方式」はのちのリストラの原型となった。労働時間の長期化、サービスマン残業、過労死、単身赴任、出向などはその事例である。

八〇年代はレーガノミクス、

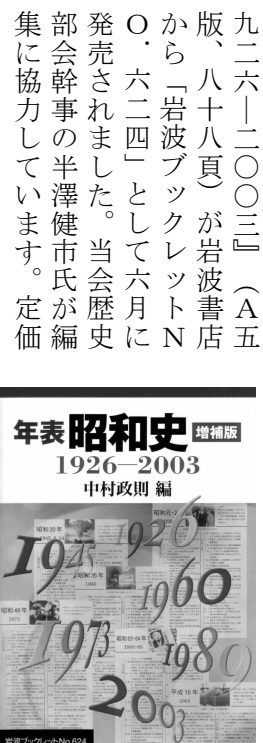
サッチャーリズム、中曽根行革と市場原理重視、規制緩和、福祉政策の時代である。日本からの海外直接が増加し対アジア投資も急増した。

■ グローバル資本主義

それは人、モノ、カネ、情報が国境を越えて動きまわる時代であり、多国籍企業の時代でもある。ジョン・グレイ(『グローバルバブルという幻想』)によれば多国籍企業は世界生産の三分の一、世界貿易の三分の二を占める。多国籍企業の地球的展開は資本の歴史的完成形態といえる。アメリカへの軍事、経済、情報の一極集中も行き着くところまで来た。日本経済のバブル発生と崩壊はこのグローバルバブルシ

出版案内 中村政則編『昭和史年表』発売

歴史部会連続セミナー講師である中村政則先生編の『昭和史年表 増補版 一九二六―二〇〇三』(A五版、八十八頁)が岩波書店から「岩波ブックレットN〇・六二四」として六月に発売されました。当会歴史部会幹事の半澤健市氏が編集に協力しています。定価



年表 昭和史 増補版 1926-2003 中村政則 編

の進行するなかで起こった。一九八五年のプラザ合意による円高政策で国内金利は大幅に低下した。企業の銀行離れ、余剰資金の株式・不動産への流入が起りバブルが発生した。金融自由化がそれを加速させた。株価と地価の暴落後の政策ミスが重なり(任専に始まる破綻処理の遅れなど)事後処理に失敗した。

■ 戦後最大の岐路

グローバルバブルシオンはどの位置付けられるのであろうか。十九世紀資本主義には自由主義国家(夜警国家)、二十世紀資本主義には福祉国家がそれぞれ対応してきたが、二十一世紀資本主義は福祉国家の解体をもたらすのか。新古典派的理論に拠るグローバルバブルシオンは、国内外における経済格差の拡大、資源枯渇による成長神話の終焉、民族紛争の激

化、テロリズムの横行、アメリカへの力の集中、反グローバルバブル運動の発生、など多面的な様相をもたらしている。日本にとって戦後最大の岐路は憲法改正問題であるがこれもグローバルバブルシオンの影響を免れない。最大の争点は憲法九条と象徴天皇制(女帝論、元首論)である。(基本的人権、環境権などもあり)条文個々への関心は必要だが、私は今必要なのは「国力とは何か」、二十一世紀の日本をどういう国にしたいのか」といふ基本的問題を考えることだと思っている。国力とは経済力、軍事力、外交力、文化力、情報力を総合したものである。日本は軍事力で世界一になれないしなる必要もない。経済、外交、文化、情報で世界に貢献する道は存在すると思う。(文責 半澤健市)

歴史ツアー 報告

五月七日〜十日・二十五名が参加 桜と地元各氏の歓迎・協力を得て 充実の旅

★松前・函館・札幌を旅して

石川直義

昨年五月の佐倉の歴史の旅の折、次の旅先として松前、函館が浮上り、企画を進めた。発案理由の第一は、会員の松前孝廣氏(旧松前藩主二十三世)から、「北海道開拓の拠点となった松前藩の地と日本一の桜を一望になりませんか」との情熱的勧誘を受けていたこと。第二は、日本近代化前夜の歴史、戊辰戦争の最後の舞台を訪ねてみたかったこと、第三には岩倉使節団研究者として有名な北海道大学名誉教授・田中彰氏の札幌で

の講演の承諾が得られたことであつた。この件は私の高校時代の学友山田家正氏(北海道開拓記念館館長)に会場の設営も含め一切の労をとっていただいた。

★歴史ツアーを終えて

松前 孝廣

祖父松ヶ崎萬長(母方)が岩倉使節団に縁がある関係から入会しましたが、二〇〇一年五月の歴史ツアー「青木周蔵那須別邸」(松ヶ崎萬長設計)に多くの会員の皆様方がご参加下さり、また今回は、父祖の地「松前」を選定していただき喜ばしい限りです。諸行事も好天に恵まれ、北の小京都松前の歴史、観桜を楽しんでいただき、総て、無事終えることが出来ました。これも偏に、函館・井上市長、福島・村田町長、松前・前田町長はじめ、ご尽力の方々の賜であり、謹んで謝辞を申し上げます。

■旅行記

小野 博正

松前はころにふれむ桜かな
北国のもてなし百花整ひて

●五月七日(金)・松前
一行二十五名を迎えた松前は、あらゆる面でこれ以上のないもてなし振りであつた。第一に天佑というべきかまたとなに快晴であつた。

次に『春風爛漫、桜花繚乱、曆程ニ乾杯シ、花影ニ酔フ。道ハ北ノ古都松前ニ至ル。花ハ紅ナリ 松前ノ春』と、まさにこの詩の如く道南の地・松前は町中が桜の海。北国の春は、一気に百花が開花する花の街でもあつた。梅、桜、連翹、タンポポ、菫、水仙、チューリップ、辛夷、白・紫木蓮等。名物の桜に至つては、城下町に二百五十種、一万本が咲き誇っている。桜の名前もいろいろ。光善寺の古木・血脈桜(けちみやく桜)、南殿(なでん)、雨宿り、糸括り、関山(かんざん)等の八重桜が豪華さを競い、しつとりとした染井吉野もしつかりと健在。

会員の松前氏は地元のお殿様のご子孫で、その郷土愛と大変なホスピタリティが町を動かし、町を挙げての歓待を受けた。昼食は十八代松前徳広藩主が京都から公家のお嫁さんを迎えた婚礼の祝い膳メニューを再現した目にも鮮やかな朱の椀とお膳の松前御膳。午後は、福山城や、公園、始祖・武田信弘から十九代に及ぶ二百六十年の松前藩、藩主松前家墓所や、いまに五つ残る寺のいくつかを回った。

京都の公家より代々、姫を迎

えた藩の戦略に、二百六十年も改易もなく続いた秘密を見た思いである。松前は江戸時代の蝦夷地への玄関口たる関所であり、北前船などでの北陸や関西などを結ぶ交易を独占、その交易品に印税をかけて藩財政を支え、「無高の藩」は「沖の口奉行所」を設けて徴税した。夕刻には、「温泉旅館矢野」に投宿。夜は、新進気鋭三十七歳の前田町長、斎藤町議会議



快晴の松前藩屋敷前に勢揃いの参加メンバー



松前御膳の昼食



血脈(けちみやく)桜

長、観光協会足田会長の同席を得て宴会となる。観光協会長の作詞作曲の松前音頭や、地元民謡・道南口説節などの披露のあと、地元とわが団員とのカラオケ合戦となり大いに盛り上がる。温泉も薄い黄土色の硫酸塩泉で、旅の疲れを忘れるのに充分。宴会後、有志で燗酒をぶら下げて、松前城に夜桜見物に出掛け、盃に桜を浮かべて、桜下に酒を汲む。

●五月八日(土)・函館

バスで松前を後にして、福島町にある「千代の山・千代の富士両横綱記念館」に立ち寄る。ひとつの町から二人の横綱が出た偉大な町の町長の出迎えを受ける。館長は千代の富士の実姉。それからトラピスト修道院と三木露風の記念碑を見学して、函館へ。

函館の五島軒で昼食を頂く。雪河亭・五島軒は建物自体も収集品もちよつとした美術館、佐藤忠良や舟越保武の彫刻、絵画や船山馨の遺墨、幕末の西洋式船・箱館丸の模型、各種地図や絵図等の思わぬめつけものと一緒に感激。海を見下ろす豪華な食堂で供された海の幸カレーライスも中々美味だった。



函館散策 (5月8日)



(上) 桜で彩られた五稜郭
(下左) ハリスト正教会
(下右) 函館の夜景

に、大三坂、チャチャ登りを経て、キリスト教会、東本願寺、ハリストス正教会などを回る。あと港地区の赤レンガ倉庫に立ち寄る。函館は路面電車が残り、長崎にも似た坂と港の瀟洒な町であった。
武田斐三郎設計の五稜郭は桜が散りかけていた。旧幕軍のブラツケリー砲(射程距離一〇〇〇M)に対し、政府軍のクルツ砲(三〇〇〇M)の差で、あえなく榎本武場の北海道共和国の夢は潰えた。その夢が跡、今は庶民の憩いの場になっている。トラピストヌ女子修道院の桜を愛でて、赤湯で有名な湯の川温泉・平成館新館に投宿。

一面のたんぼを踏みて修道院つわもの夢も隴の五稜郭

夕食時は団員の自己紹介に当てる。今さらながら、会員の

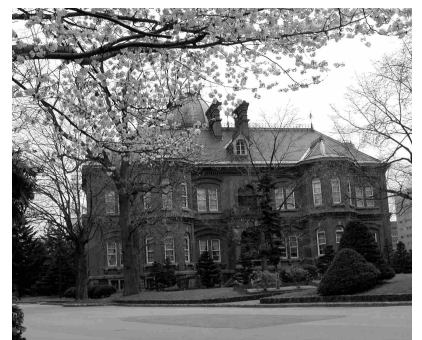
多士済々ぶりを感ずる。夕食後、再びバスに乗って函館山にのぼり、日本一と言われる夜景を眺める。天気晴朗にして、言い値どおりの絶景であった。旅館にて、ミニスカートの美女の流し目に陥落して、五人の久米の仙人が遅くまでカラオケに酔った。
●五月九日(日)・小樽へ
函館から一路バスにて、札幌に向かう。途中、大沼、小沼、長万部をへて、洞爺湖の民芸御殿にて、昼食を戴く。そして、北海道富士・羊蹄山を右に左にしながら進んで、昭和新山の麓、ダテカンバ林に残雪をおく中山峠で小休止、群生して花芽のフキノトウをビニール袋一杯に集める団員もみられた。
羊蹄山は神の一睡夏がすみ
十五時に北海道開拓村の隣り合わせの、北海道開拓記念館を訪れる。会員石川さんの学友でもある館長以下の出迎えを受けた。旧石器時代から、アイヌ文化、蝦夷地、近代から現代にいたる歴史が通観できる堂々たる博物館であった。折しも、松浦武四郎の特別展も展示されており、閉館後も、所員や学芸員の熱心な説明を受けた。バスで札幌から小樽へ向い、小樽ヒルトンに投宿。夕食前に、夫々小樽の運河地帯など散策。夕食時は、四人ずつのテーブルに分かれ、夫々の話題に花を咲かせる。



北海道開拓記念館
山田家正館長他に謝辞

●五月十日(月)・札幌

午前中、小樽の練御殿を見物のあと、バスの車窓から札幌市街を眺めて札幌フアクトリに至り、昼食は、ジンギスカン料理に舌鼓を打つ。午後一時から、重要文化財である「赤レンガ庁舎」(北海道庁旧本庁舎)八八八年創建の由緒ある会議場で開催された歴史講演会には我々一行二十名を含めて百八十余名を集めての会場に入りきれないほどの盛況であった。主催は、北海道開拓記念館、米欧回覧の会、北海道新聞社、後援はまなす財団、北海道開発技術センター。
まず当会作成ビデオ「映像が語る岩倉使節団・米国編」(三十分)が上映され、一般聴講者に非常に分かりやすい導入ガイドとなった。今後の、当会の啓蒙普及にもこの映像は有効であると感じた。泉三郎代表が「岩倉使節団とフロンティア・スピリット」を講演され、続いて岩波文庫米欧回覧実記の校



北海道庁旧本庁舎 (講演会会場)

注者である、北海道大学名誉教授田中彰氏の「岩倉使節団の今日的意義」の講演があった。田中氏は、しきりに小国主義を唱えられたが、「小国主義」なるものが「実記」に源を発するかどうか、またその後、「小国主義」の水脈が伏流水の如く現在に繋がっているかどうかは、議論の分かれるところである。然し、「実記」を離れても、我が国の未来を考える意味で「小国主義」を再検討して見ることは意味深いものと思われる。

散会后、ホテル・ポールのタートルにて、講演会の主催者、後援者による懇親会に有志者が出席した。今回は、現地参加の組、一泊組、延泊組などさまざまであったが多くは終わると慌しく、新千歳空港に駆けつけて二十時五十分発のJALにて無事に旅を終えた。

(写真) 松前孝廣
(写真) 橋本吉信

特定非営利活動法人(NPO)設立認定申請

「米欧回覧の会」、まもなく正式発足

去る四月七日付けで、当会の特定非営利活動法人設立認定申請を行い、四月十二日に受理された。約三ヶ月後には認可がおり、その後登記されて正式に発足する予定である。八年を超す実績をもつ「米欧回覧の会」は、その時点で定款の第一条に示された「米欧回覧の会」となる。全五十八条に及ぶ定款の中から、第三条に記載されている法人の目的全文を以下に記し、当会活動の原点として改めて確認しておきたい。

『この法人は、「岩倉使節団」とその記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々を中心に、この素材を源流として「世界」を知り、「日本の近代史」を学び、「温故知新」の精神を以って、現代日本の直面する諸問題についても率直に意見の交換を行い、併せてその成果を広く一般市民、とくに若い世代の啓発に資し、それによって「よりよい日本」、「よりよい世界」のために、いささかでも寄与・貢献することを目的とする。』

登記される設立当初の役員

六名および監事を紹介する。任期は二年。

- 理事長 泉三郎
- 副理事長 山田哲司
- 理事 水澤周
- 理事 塚本弘
- 理事 藤原宣夫
- 理事 半澤健市
- 監事 岩崎洋三

今後の実際の活動は、従来通り幹事(理事・監事も幹事を兼ねる)中心に行われ、さらに、担当幹事を補佐するスタッフを新任する新たな組織によって運営される予定である。

【担当幹事】

- ▼実記を読む会 (幹事) 水澤周、多田幸子
- ▼英文実記を読む会 (幹事) 小林養丈、岩崎洋三
- ▼歴史部会 (幹事) 半澤健市、永富邦雄、小野博正
- ▼現未来部会 (幹事) 塚本弘、小田仁彦、西井正臣
- ▼国際交流部会 (幹事) 藤原宣夫、尾崎美千生
- ▼総務部会 (幹事) 山田哲司、浅沼晴男、足立光正、石川直義

実記を読む会報告

連絡 クラウンインターチェンジ

Tel 03-5469-2090 Fax 03-5469-2093

info@crown-interchange.com



六年目に入った『実記を読む会』は、今年二月で『第七十一回』を迎え、毎月一回の例会で、五月の『第七十四回』まで読み進んだ。今年はいギリス編』を毎回ほぼ一巻ずつ読み進めて、

議の時間が少なくなつたとの反省もあり、六月からは現代語訳は分からない部分のみを、すでに現代語訳の完訳を終えた水澤氏に尋ねる程度として、本来の実記の原文記述を読みながら、内容に関する質疑応答や談論風発の論議に戻すことにした。とは申せ、今までも実際には、多種多様な経験と経歴を持つ会員が多いため、毎回経験を生かした発表が楽しめている。

あつて大満足、充実したものであった。



倫敦「シチー」之廓門(銅版画)

現在までに二十二巻の『ロンドンの記、下巻』まで終えた。出席者は毎回すこしずつ入れ替わっているが十八名から二十五名程度である。都度会費三千円(食事・飲物付)で、会員の多田氏のサロンを毎回使わせて戴き、十八時三十分集合し、三十分が食事タイム、食後の十九時から二時間を用途に、実記を読みながら、内容に触発された談論風発の会員の会話を愉しんでいる。終わりにティータイムがあり散会する。

今年、一月より例年とは多少趣向を変えて、現在、水澤周氏が実記の現代語訳に取り組んでいて、事前にも一部現代語訳にも挑戦してもらっている。然し、最近では若干、現代語訳に力が入りすぎて、訳の競演のおもむきがでて来て、内容の吟味や、内容に触発された論

その他にも、国会図書館で英国陸軍の兵力規模や配備を調べられて実記と比較された阿部氏。電信の項では、「英国の海軍力は、実は百年以上も前に海底ケーブルを世界中に張り巡らせた電信ネットワークとリンクしたその情報力に源泉があつた」と、電信に憧憬の深い吉原氏の話や、西井易徳氏は、ロンドンの郵便事情のくだりで、江戸の飛脚から郵便や切手の制度を取り入れた日本の郵便の歴史にまで及び、果てには手品のごとくに、日本では西井氏の外に持っている人がいないだろうという二〇〇八年の北京オリンピックの記念切手セットまで取り出して見せた。毎回、会員の工夫で、充実した内容が楽しめる実に面白い会である。まだ覗いたことがない方はどうぞ一度おいでください。

中山進、坂田隼通、岩崎洋三、楠木孝雄
 ▼関西支部
 (幹事) 山崎 岳磨

最後に、NPO法人化に伴って新たに会則に加えられた「準会員」などの扱いについて幹事会で整理された結果を紹介しておく。
 準会員とは学生、家族、遠隔地在住者、仮会員(一年を限度とする)については、行事に参加した場合、それぞれの各部会幹事の責任で本部に報告の上、

出版案内

泉三郎著

「岩倉使節団という冒険」 文春新書

七月二十日、文芸春秋社から発売予定。
 国家的大手術、廃藩置県の直後における大型使節団の派遣、それは果たして「暴挙か、壮挙か」という

問いかけに始まり、旅を追いながら、主要人物の動静を中心に、岩倉使節団の歴史の意味を問う内容になっている。
 主な目次は、次の通り。

- (一) 新たな世界へ
- (二) 金ぴか時代のアメリカ
- (三) 最盛期の英国を往く
- (四) 欧州大小十カ国、二百十日、縦横の旅

実態捕捉できるようにする。なお、部会などに連続して参加意向の場合は、積極的に正会員化を促す努力をすることが確認された。準会員の会費は年額二千円とし、ニュースや諸案内は事務局から正会員同様に送付される。
 尚、総務部会が新設され、これまでのメディア部会は、その中に包含されることになった。

(五) 中東・アジア・そして日本
 二百二十四頁、七百三十五円。

また、同氏の著書「堂々たる日本人―知られざる岩倉使節団」(祥伝社・平成八年版)が、このたび同社の黄金文庫の一冊となり、六月十日に出版された。二百九十一頁、六百円。



黄金文庫版

さて、今年読んだ部分で、著者の久米邦武が随所で述べている感想にこんなものがある。例えば、『欧州が現在のようになつたのは、一八〇〇年以降のことであり、最も盛んになつたのは、ここ四十年くらいに過ぎない。』一八〇〇年のロンドンの人口はわずかに九十六万人。鉄の生産高も五十万トンに過ぎず、その後、一八三〇年代に汽船・鉄道の便が開始され貿易が急激に伸びたが、技術教育の必要性を感じたのもわずかに三十四年前のことである。『一八五一年のハイドパーク万博、一八五五年のパリ万博を経て工業製品が多彩になったのもこの十年余りのことである。』『農業の重要性に目覚めたのも一八三〇年以降のこと、農業改革が進みだしたのも二十年前に過ぎない。』等々。実際に岩倉ミッションが欧州を回遊した一八七二年は、イタリヤの統一とフランス第三共和国成立が一八七〇年、ドイツ統一やパリコミューンが一八七一年であったことを考えると、明治維新の日本は実にいいタイミングで欧州の文化に対峙できたというべきだろう。久米が、まだまだ日本は欧州に追いつけるとの確信も持つて自らを励ましている吐息が行間にはじんでいる。

(文) 小野博正

英訳実記を読む会報告

連絡 岩崎洋三

Tel & Fax 03-3488-0532

zaa96087@oak.zero.ad.jp



昨年の一ヶ月以来毎月のペースで順調に一年半続いている。毎回十人前後が熱心に勉強している。基本的な進め方は、まず輪番の当番が担当範囲を音読。その後、翻訳者によって付け加えられている注を改めて日本語訳、インターネットで英語の文献に関連する情報や現地資料の紹介や原文の表現との違いで気が付いたことなどを報告し、意見交換。

わざわざ英語で実記を読むメリットは、もちろん英語の勉強になること、難解な原文より英語の方が理解しやすいことにある。原文では分かりにくいカタカナ表記、人名や地名などの固有名詞がかなりきちんとしたスペルで書かれ、調べるのが容易になる。また、久米の漢語を翻訳者が英語でどう表現するかをみるのも楽しみである。

来年の十周年記念シンポジウムには、勉強成果を発表したいと盛上っている。多くの方の参加をお待ちします。

(文) 岩崎洋三

関西支部報告

連絡 山崎 岳磨

Tel&Fax 06-6853-3137

takechan@tcct.zaq.ne.jp



例会報告

四月十六日(金)、十五名が参加。
 会食時に船戸さんが持参した芳賀先生のNHK講座(京都の美術関係)のビデオを上映した。その後山崎さんから米欧回覧

の会のNPO化への説明があり、機関紙が欲しく準会員として頂けるならあり難い等の意見も出たが今後の推移を見ることになった。
 一時より北村彰一が凡例、例言よりほとんど各ページ音読して行つた。いくら黙読しても声を出して練習しておかねばうまくいかないと痛感した。国名等の中国語表記、中国の地誌の影響、温度、銅版図が話題となる。その後、プリントを配布し、久米博士九十年回顧録(実記を補う裏話の出所で必読の書)の紹介をした。

コーヒーブレイク後、第一、二巻にかかったアメリカ号の絵をビデオで見る。船内規則、船賃、が話題になり大圏航路を通っていないこと、マラソンの速度であると指摘があった。「カール鳥」がGULLとは発見

(文) 北村彰一

「米欧回覧の会」ご案内

趣旨 この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この大いなる旅と「実記」はまさに「温故知新」の宝庫と言えましょう。
この素材を媒体にして歴史をふりかえり現代の直面する諸問題についても自由に語りあおうという会です。

会員 上の趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

例会 年に4回くらい全体例会をもちます。

部会 テーマ別に読む会、歴史、現未来、メディア部会等があり、映像サロン・勉強会・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。

機関紙 年に4回程度機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

幹事 会員の中から、代表1名、幹事十数名を選び、運営を担当します。

会費 年会費5,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。

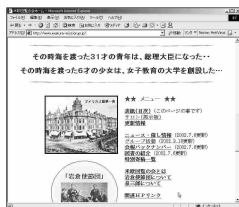
事務局 当面「イズミ・オフィス」に置きます。

〒192-0063 八王子市元横山町1-14-16
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp
TEL:0426-46-3310
FAX:0426-45-8700

入会申込

氏名・連絡先(自宅或いは勤務先の住所・TEL・FAX)現職&キャリアを事務局までFAXまたは郵便でお送りください。なお年会費は郵便振込が便利です。

00180-2-580729 米欧回覧の会



.....ホームページのご案内.....

◇米欧回覧ニュース第1号からのバックナンバー など

* 皆様のご意見をお聞かせ下さい

<http://www.iwakura-mission.jp>

<催し案内>

2004年7月の予定です

☆七月全体例会

日時：7月3日(土) 13:00~17:00
場所：国際文化会館 講堂
講演：岡崎久彦氏 15:00~17:00
テーマ：「現下の国際情勢と日本の外交」
会費：会員2500円、一般3000円

☆実記を読む会

日時：7月8日(木) 第27巻 里味陂府の記下
(8月はお休み)
場所：南青山クラウンインターチェンジ内サロン
電話 03-5469-2090

☆英訳実記を読む会

日時：7月15日(木) 18:30~21:00
(8月はお休み)
場所：国際文化会館 セミナー室
会費：1000円(食事・飲物はできません)
世話人 岩崎洋三 zaa96087@oak.zero.ad.jp

☆現未来部会

日時：7月7日(水) 18:30~21:00
場所：国際文化会館
テーマ：「新薬開発と臨床試験・特許問題の日米比較論」
講師：西井易穂氏(医学博士、中外製薬(株)で研究所長、取締役を歴任)
会員の西井氏は、有力な新薬の開発で世界的に注目を浴び、売上も巨額にのぼることから近年裁判でも問題になっている特許報酬のあり方や臨床試験について日米の考え方を比較しながらお話をいただきます。

☆関西支部例会

日時：7月16日(金) 12:00~17:00
場所：大阪凌霜クラブ会議室
講義：松田裕之氏(甲子園大学助教授・会員)
テーマ：「(山崎岳麿氏の祖父にあたる士族出身のある通信技手の手記と『実記』に見られるITの黎明」
会費：2200円(食事不要の場合は1000円)

編集後記

◇二〇〇一年の国際シンポジウム特別号以来、久々の十二ページとなりました。特別な事業がなくても増ページとなったのは、それだけ当会の活動が活発に行われ、伝える内容が豊富になった証です。間もなく、当会はNPO法人に正式になる予定、そして、来年は十周年の年。増ページが続く気配です。
◇七頁掲載の中村政則教授編「年表昭和史増補版」(岩波ブックレット)のはしがきに、『今回は社会人生活四十年のキャリアを持つ半澤健市氏の協力をえた、記して、謝意を表する』とあり、刊末には中村教授とともに半澤氏の経歴も掲載されています。連続セミナーが単なる講演会に留まらず、質の高い研究会になったのは、セミナーに備えて特別に準備された中村教授と会員による切磋琢磨の賜物だと思えます。
◇従来から指摘されていた若い世代へのアプローチが全体の問題となり、様々な方策が議論されるようになりました。若い世代を惹きつけ、啓発するのは、世代を超えて誰もがその知識・見識を認める会員自身のもつ力で、ニュースやホームページで、その力を伝えることに努力したいと思えます。(N)